

鈴木加成太歌集

『つすがみの銀河』

(角川書店)

なんて素直で、それでいて特別な歌なのだろうか。

鈴木直近十年間、十代から二十代までに詠んできた歌を取めた本書は、読むほどに引き込まれる歌で編まれている。どの表現も、「ああ、なるほど」と膝を打てるギリギリの距離にあり、そうした納得や共感には押し付けがましさがなく、爽やかさや確かな必然性を感じられる。

重力というやわらかさ 惑星と紙飛行機の浅き接触

地平線焼き切るときの火の匂い 簡易珈琲のふくろを

ひらく

作歌時期が近年に迫るごとに、鈴木作風はより技巧的になり、そして仮名遣いも変化する。あとがきにて鈴木は、仮名遣いの変化は自身の意図であるとともに「歌自身が言葉を選び取った」と語る。

しるながすくぢらの息を吐きながら新宿の夜に着く夜
行バス

声変はりしてうたへなくなる曲の高音域にゐる夏の
日々

技法の変化に振り回されたり、過度に老練になったりせず、静かではあるが確かに自身の詠みが貫かれている。言葉に身を委ねられる程の没入が、きつと本書に辿り着くまでに深く幾度も繰り返されてきたのだろう。

(宮 梓一)

石畑由紀子歌集

『エゾシカ／ジビエ』

(六花書林)

北海道に暮らす作者が、身近な自然と動植物、人と心を詠う第一歌集。生きる「エゾシカ」、肉となった「ジビエ」のタイトルからは、死生のテーマが匂い立ってくる。

生きていた頃の傷あとそのままの革手袋に雪の結晶

ヒトだからきみを放した エゾシカのジビエにもう一度火を通す

手袋になった革は、元々動物の肉体であった。奪った側の人間としての責を感じさせる雪の冷たさと結晶の美しさを想像する。二首目の「ヒト」の表記からエゾシカとの対比がわかる。エゾシカは逃れることができずジビエとなり、ヒトの手で二度も火にかけられる。

焼く前にペースメーカーはとり出され神とは人のこと
であったか

祖父の火葬の際に、ペースメーカーが肉体からとり出された場面である。死生を操作できる機器を作り、体内に宿す人間を神ではないかと考える。人間への畏れを自覚し、また非難的にも思える下句が印象的だ。

たわむれに鳥の単位を授けられいつか食べられるか人
間も

雪や動植物や人間の死の歌も多く、全体からは雪国の冷たさが漂い、残酷で美しい歌に惹かれる。

(椎名恵理)